思い起こすこと、ならびに近況について

2025年12月15日　記

高校３回　　髙 山 欣 也

初めに　高校２回の大島齋禮氏が2025年11月17日逝去されました。ご冥福お祈りするとともに、氏の努力と成果を末永く称えたいと思います。

１．同期会員の状況

旧制の浦中入学が昭和20年（1945年）４月。その年の８月にポツダム宣言受諾・終戦でした。悔しさの反面、恐怖と緊張を強いられた連日の空襲が無くなりホットした記憶は今でも鮮明です。

動労動員されていた３、４、５年生が復帰され、校内が落ち着いたころ体操部員募集の掲示が出されました。かねてから関心があった（注）ところに同級の川鍋誠美君に誘われ入部を申込みました。相前後して小川昌雄君、宮下嶺一君が入部し、数多入退会がある中、この４人は高校３年まで体操部活動を続けました（宮下君は高校３年に慶応高校へ転校、体操部に入部）。

（注）私が体操部を希望したのは、兄３人が旧制浦中に在籍し（中34、43、46回）11月３日の運動会見物に度々出掛け、体操部（兄３人は無関係）の演技に見とれ、いつかは自分もああなりたいと、素質もなにも考えず夢見ていたわけです。

私以外の３人は大学時代も含め国体出場を成し遂げましたが、案の定、私は夢を適えることができませんでした。

高校卒業後も４人の結束は堅く、近藤正夫氏（中43回）のもと、戦時休止していた麗和体操会の復活の実務に携わり、以後中嶋健二氏（高12回）に引き継ぐまで会運営の実務に当たりました。

麗和体操会関係以外にも、たびたび親睦の機会を持ちましたが、昨今、物故者がでたり体調を崩したりで交流が絶え、寂しくなりました。

昭和20年代の体操部事績は「浦高八十年誌・銀杏樹」に概略記載。

P.134 「クラブ小史・運動部」

P.52～54「運動部の活躍」　p.57～58「運動部の活躍Ⅱ」

Ⅱ．思い起こすこと

終戦直後の情景で、今でもはっきり目に浮かぶことをいくつか記したいと思います。

◎平行棒

入部して初めて部室に入ったところ見たこともない器具が目に飛び込んだ。「平行棒」と教えられた。分厚い板の両端に鋳物の脚部を取り付けたもので、昨今の一体成型と異なり車輪もなく、移動は数人が担いで行った。競技種目になったのは何年か後だが、それまでは県内唯一とのこと。戦前から導入された先輩方々の先見の明に感服。

◎マット

入部当時のマットは芯（中身）が麦藁だけ、スポンジなど影も形もない。これが雨天体操場に積みあげてあった。カバーは破れ麦藁がむき出し。練習の合間、藁に残った実を摘み殻を剥き、洗いもせず口にいれてガム風に噛んで口の寂しさを補ったりした。衛生観念のすすんだ今日では考えられない姿。

◎凄惨な出来ごと（体操部活動とは無関係だが敢えて記します）

終戦直後、野球場で、退去前の陸軍糧抹廠の下士官風人物が、飼育してきたと思われる豚を柱に繋ぎ、頭を鉄槌で強烈に殴り始めた。豚の血や悲鳴と鉄槌の勢いが混ざり合った凄惨な事態に目のやり場もない。後日その辺りを通ったら内臓が半分むき出しのまま埋められていた。

Ⅲ．近　況

(1)体　調

◎　昭和７（1932）年生まれ、９月で満93才になりました。年を追ごとに体力の衰えを感じます。体操部現役時代に蓄えた「貯筋」もすっかり使い果たし痩せ細りました。でも現状は、ほぼ毎日ストレッチ、ラジオ体操を励行し、食欲旺盛、歩行杖無しなど体調は好く、これも体操部時代の練習の遺産かと思う作今です。ただ外出機会が少なく歩行数充足が当面の課題。

◎　数年前、生まれて初めて入院を経験しました。人生の岐路でした。参考までに一部始終を説明させていただきます。

10数年前から半年ごとに脳神経外科で脳のＭＲＩ検査を受けていました。初め何年かは異常なく経過しましたが、そのうち髄膜に小さな斑点が生じ、

（次葉へ）

検査の度ごとに大きくなってきました。しかし痛くも痒くもなく、医師からも特に指摘無く、また、解説書によると脳腫瘍の一種「髄膜腫」で悪性は少ないとあり、軽く考えていました。

斑点は拡大を続け脳に触れんばかりとなったところで2020年７月東京医科歯科大で摘出手術を受けました。病理検査によると摘出片には癌の要素（a．b．cのb段階）があったとのことで胸を撫でおろした次第です。退院後、定期的に検査を受けていますが、今のところ新たに発生は無く順調です。

以上の経過を振り返ってみるとき、何の症状もないからと検査も受けずに過ごしていたらどうなっていたか、考えるとゾッとし冷や汗が止まりません。

(2) 趣　味

私の趣味は「きりえ」（「切り絵」とも書く）です。きっかけは、熊谷の妻の実家が古くなった養蚕独特の母屋を取り壊すことになったため、何らかの形で姿を残したいと、きりえの手法を使ったところ案外の出来だったため趣味として定着しました。52.3才の頃のことです。以来40年間、毎年、日本きりえ美術展（毎年11月　都美術館）に出品しながら今日に至りました。また、この間に個展を２回開催しました（1999年コルソギャラリー、2022年９月彩光舎）。もう１回との声を頂いており、自分にもその気持ちはありますが年齢との勝負になりそうです。

カッターで切った線には、筆などで描いた線とは異なる独特の味があり、きりえの魅力の一つです。作例を５点ほど紹介します。

①「追憶・裏窓から」（2005年作）　浦和・仲町　前市民文化センター付近（昭和30年頃市民文化センター建築前のスケッチより）

②「追憶・運河と工場（2007年作）　大阪・西淀川工場地帯（昭和30年頃のスケッチより）

③「峠、遥か」（2014年作）　奥秩父・栃本から甲州方面を望む

④「マリオネットへどうぞ」（2020年作）プラハの人形劇場

⑤「古城夕景」（2024年作）　チェコのカール シュタイン城